
呼ぶもの

NZ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

呼ぶもの

【Nコード】

N4382S

【作者名】

NZ

【あらすじ】

ホノルルで教職に就いた遼一は、マットと名乗る風変わりな日本人に出会う。異国の寂しさが、遼一とマットの付き合いを続けさせている内に、二人は夜中の海で奇妙な体験をする。マットが見たものは、果たして唯の幻覚だったのか？ マットを心配する遼一は、同僚のグラントから、ハワイのゴーストに関する知識を授けられるが、マットが関わっていた問題はゴーストだけではなかった。

第一章

「ねえ、疲れてんの？」

親しげな響きの日本語で背後から肩を叩かれて、私は飛び上がった。ここでそんな風に私に話しかける人間はいないはずだったからだ。

日没が迫ったワイキキの歩道で、振り向くと小柄な日本人の男が笑みを浮かべて立っていた。どこかで会ったことがあるかと考えを巡らせたが、そうとは思われない。

金髪に近い髪を整髪料で逆立てて、タンクトップからのぞく焼けた肌には刺青が目につく。サングラスをかけているのに、その微笑みは顔全体からにじみ出ているように感じた。それほど若いようには見えない。

「のんびり飲める場所、知ってるよ。何なら女の子も呼べる」

続いて彼の口から出た言葉と、その手に握られているビラで声をかけて来た理由を悟った。

「いや、別にいい」

「そう？ 日本の女の子だよ」

正直に言っただけで心が動いた。しかし、幾ばくかの金を払って愛想を振りまいてもらったところであえて空しくなるだけかもしれない。いやあ、とだけ言っただけで私は俯いた。

「男の方がいい？ 普段は外センだけど、綺麗な子がいるよ。あ、それとも地元の子がいいかな？ すごく可愛い子がいるんだ」

まるで奇術師がうさぎや花を取り出すように、彼は次々とオプシヨンと並べる。私は苦笑して、今度ははっきり断った。

「じゃ、飯でも食いに行こう」

微笑んだ顔をさらに綻ばせて、彼は私の腕を掴む。

「どうせ何か食わなきゃなんないだろ？ 一人で食うのはつままないじゃん？ ぼったりしないよ」

彼自身のことを言っているのかもしれなかつたけれど、私の心境を言い当てられた気がして、手を振り解くことが出来なかつた。彼の目的が何であつても、まだ日があるし、危なそうなら走つて逃げればいい。

連れて行かれたのは、ほんの二ブロックほど離れた路地の裏にある焼肉屋だつた。夕食時になりつつあるのに、目立たない場所にあるせいか店内は閑散としている。

彼は軽快な調子で店員に「今日は客だから」と声をかけた。

「時々この店のビール配りとかやってんの。安いし美味いんだよ。マジで」

油っぽいシートに腰を下ろすと、ほぼ同時にビールとナムルが出て来た。私の意見を聞かず、メニューも見ずに、彼が韓国人と思しき店員にあれこれと注文している間、周囲に目をやった。

黄ばんだ壁には英語と韓国語と、稚拙な日本語で書かれた品書きが貼つてある。確かに日本で食べる焼肉よりも安いだろう。

「強引に誘つちやつて悪かつたけどさ、あんたしよっぱい顔して歩いてんだもん。悪いのに引つかかるよ、そんなだと」

ハワイではありふれたビールの小瓶を一息に半分ほど飲み干してから、彼は溜息と共にそう吐き出した。屋内なのに、サングラスはそのままだ。

「そんなにひどい顔かな？」

聞きながらも彼の言つた「しよっぱい」という表現ほど今の私を的確に表す言葉はないと思つた。

「うん。なに？ 単身赴任？ 観光じゃないだろ？」

なぜ彼が観光客ではないと思つたのかは分からない。服装のせいとか、雰囲気か。いずれにしる見ず知らずの男に、自分の仕事や状況を話していいものかどうかと逡巡している間に注文の肉がやって来た。店員が訛のある英語で「サービスしておいたよ」と笑顔を彼に向ける。

店員がアメリカに来て長いわけではないらしい、と分かる程度に

は私も英語に馴れて来ている。もっとも私の英語は、もっとも粗末なものだけれども。

質問に答えずにいるのをどう取ったのか、何も言わずに彼は肉を網に並べ始めた。

本当に久し振りに日本語の会話を交わしながら、食べ慣れた物を食べるのは美味かった。大した言葉ではない。「それ、焼けてるよ」「こつち先に食った方がいいよ」というような、それだけの会話が調味料になることを初めて知った。

「俺、マツトっていうの」

皿の肉が半分ほどに減った頃、彼は無邪気に自己紹介した。彼の日本語は明らかに日本で生まれ育った人間のものだし、店員との英語の会話でも微かながら日本語のアクセントがあった。アメリカの市民権を取り、改名でもしたのだろうか。

疑問を口にする、彼は唇の端を吊り上げて笑った。

「俺と付き合ってれば、その内分かるよ。それよりあんたの名前は？」

「木戸、木戸遼」

名前を言った後、仕事や住んでいる場所まで話したのは、食事があまりに美味かったからだろう。こんな話を日本語ですることも、久し振りだ。

ハワイに来たのは二ヶ月ほど前だ。ホノルル市内にある小さな私立大学で、日本語および日本文学の講師の口があったからだ。大学院を出ても大学の仕事などあるわけもなく、高校の非常勤講師を掛け持ちして生活していた私には、大学での仕事と聞いただけで充分魅力的だった。

学校は小規模だけれども学生のレベルは高く、講義は日本語で大丈夫と聞いていたが、とんでもなかった。

地元の人間にさえ、そういえばそんな学校があったかもしれないと言われる程度の小ささは我慢出来るとして、学生は意欲の欠片もなく、講義は稚拙な英語を駆使するより他なかった。

就職が決まってからの数ヶ月、英会話学校で特訓を受けたくらいでは、日常会話ですら少し複雑になればままならない。英語での表現が出来ずに講義の途中で絶句する。

「上手く言えないのですが」という一言すら出てこない。そうした時の心配そうな顔、呆れ顔、あるいは面白そうな見物顔にはなかなか馴れない。

唯一いた専任の日本人教員は、私と入れ替わるように一年の研修のために日本へ帰ってしまい、残された私は、たった一人で英語の環境に取り残された。勤め始めたのは、大学が正式には夏休み中で、サマープログラムと呼ばれる短い期間の講座からで、もうじき終るが達成感にはほど遠い。

「大学の先生なんてすごいじゃん。ビザもちゃんと出てんだらう？」
カルビを頬張りながら、マットは無邪気に言う。

「でも、ずっと英語でやり取りするのはしんどいよ」
同僚の教員達や、事務の人々はとても気さくで親切だ。色々気を遣ってくれているのも分かる。食事に誘ってくれたり、あるいはホームパーティーに呼んでくれるのも有難い。

しかし、そういった場所で半分も分かるか分からないか程度の英語でやり取りし、見たこともないテレビ番組の話に相槌を打つのは苦痛なのだ。彼らが冗談を言って笑い合うときに、理解出来ずにいるのは、一人でアパートにいることより何倍も孤独だ。

といってアパートにいれば楽しいというものでもない。石川啄木の「ふるさとの訛なつかし……」という気分で、私は観光客の多いワイキキをさまよっていたのだった。

「じゃあさ、つままないときは、ワイキキに来なよ。俺、大抵はこの辺らぶらしてるから遊んでやるよ」

屈託なく笑ったマットは、まだサングラスをかけたままだったが、茶色のレンズの奥の瞳が優しくに細められているような気がした。

お互いの携帯電話の番号を交換して別れたその夜以来、週に一度

か二週に一度の割合で、マツトと会うようになった。はつきりとは言わないが、彼の年齢も私と同じ三十代前半ということが分かってからは、より親しみが湧いた。

何ということはない。会って食事をしたり、酒を飲みながら他愛のない話をするだけだ。観光のメツカ、ワイキキ内に無数に置いてある日本人向けの情報紙などのせいで、マツトは日本の話題も詳しくかったし、何よりも私の下らない愚痴に親切に付き合ってくれた。

初めて会ったとき、彼が何をしているのかその内分かると言っていた意味も次第に分かった。仕事は常に行き当たりばったりで、怪しげな店の客引きやビラ配りが主だし、時折、非合法薬物を扱っている気配すらある。住んでいる場所も一定していないようだった。

それでも彼と会つと、不思議とくつろいだ気分になれた。それを言つと、

「だから俺、女の子には不自由しないんだ」

彼は得意そうに笑った。実際、彼の周囲には常に複数の女性の匂いがしていて、自分でアパートを借りずに済んでいるのもそのためらしかった。

彼によれば女性との付き合いはなくてはならないもので、私の世話も焼きたがった。

「遼一は固い仕事なんだし、紹介したら喜ぶ女の子はいっぱいいるけど」

何度マツトに言われても、頷かないのには理由がある。三年ばかり付き合っている女性がいるのだ。相手も三十を目前に、そろそろ結婚したがっているのは分っている。常勤の大学講師への足掛かりとして今の仕事を受けたのも、彼女との結婚を意識しているせいもあつた。

遠距離恋愛でも、今は電話もメールもある。しかし、相手の笑顔を見られず、その肌にも触れられないのは、寂しい。

彼女がいるから、と誘いを断る私に、マツトは呆れたような半分同情したような顔をした。

「いいけどさ、あんまり真面目過ぎるとアタマおかしくなっちゃうぜ」

「おかしく」なった人間を知っているのか、と聞こうとして止めた。自分とは関係がないと思いたかったからだ。確かに私は寂しくて、どうにかなりそうだと思うことがある。だからマツトと会い続けたのだ。

彼と会うのはいつも夕方だ。ワイキキの大通りに疲れた陽射しが落ちる頃、彼のサングラス越しの笑顔に会いに行く。日本のプロ野球がどうだとか、このあいだ俳優の誰それがワイキキを歩いていたとか、世間話をしているだけで慰められた。

とはいえ日本人の多いワイキキでも、異郷にいる自分を忘れることは難しい。

免税店の近くをぶらぶら歩いていた時だ。通りかかった白人の女が「ハイ、マツト」と声をかけた。どういう職業か一目で分かる服装だった。

「アレある？」「いや、今はない」といった不穏な会話を聞こえないふりをしてやり過ごすと、マツトは妙に朗らかに笑った。

「あいつ、本当に好きでさ。気のいいお姉ちゃんだけだね、ドラッグにはまらなけりゃあんな商売しなくて済んだのか、あんな商売だから、ドラッグでもやらなきゃやってられないのか、どっちだろ？俺の扱うのなんて大したものじゃないけど」

私は思わず振り返って彼女を見た。尻の見えそうな短いスカートを履いた彼女は、夕食後のそぞろ歩きを楽しむ家族の側を、高いヒールの靴ですたすたと歩いて行く。染めた金髪の根元が黒くなっているのが何となく痛々しい。

昨今は日本でも非合法薬物が手に入りやすくなっていると聞いたことはある。小説などによると、そういった物を摂取しつつ「商売」をする女性だっているようだ。

しかし、日本での私の交際範囲には、薬物も売人も存在しなかった。係わり合いになりたくもない。

相槌も打てずにいる私に構わず、マットは続ける。薬物関係の話をしたことは以前にもあったけれど、そういうのは嫌いだと告げる私に、彼は「遼一に迷惑をかけるような真似はしないよ」と肩を竦めてみせた。以来、話題に上ることはなかった。

「こつちじゃ、あんなお姉ちゃんは珍しくもなんともないよ。先はどうなるのか考えてないんだろ。ホラその婆さんだって、どんな過去があるんだかね」

彼が指差した先には、コンクリートの花壇にもたれてホームレスの老婆が座っていた。風下に行けば、恐ろしい悪臭がするのは分っている。枯れ木のようになった彼女は、大小便もその場で垂れ流らしい。人種すらもよく分からない。その脇をブランド・シヨップの紙袋をいくつも提げたカップルが、愉しげに通り過ぎた。

「なんか、すごい場所だな。よく考えてみると」

「考えてもしようがないよ、馬鹿だな。きっとニューヨークとかはもつとすごいぜ」

けろりと言い放たれると、それもそうだという気がしてくる。しかし、新宿などの雑踏とは別の異様さがあるのは確かだ。

言葉や人種だけが異国なのではない。価値観や考え方、生活の違いが異邦人である自分を実感させる。たとえばワイキキを異様だと感じ、馴染めないと思うことも一つだろう。

薬物を扱うマットを好ましいとは決して思わなかったけれど、やめると諫言して他の仕事を斡旋することも出来ない。しかし、会うのを止めようとも思わない。一方マットは、薬物を勧めることは全くしないし、普段はその話もしない。馴れ合いが友人関係を支えていた。

給料が出た後など、私から申し出て勘定を持つことはあったが、マットから金銭的な負担を掛けられたことはなかった。それが私たちの奇妙な関係を長続きさせてもいた。

もつともマットは私が大学から貰う給料が、決して多くはないと知っていた節もある。

年の瀬が感じられる土曜の夜、私は電話で彼女と口論になった。

話題は私が帰省するかどうかというものだった。アメリカでは新年を数日かけて祝う習慣はないが、クリスマス休暇があるし、それに数日休みをもらえば日本で正月を迎えられる。いくら少ない給料でも、年末年始に日本に帰る飛行機代くらいは捻出できる。

しかし私は、彼女にハワイに来て欲しかった。私の暮らしている街を見てもらいたかった。加えて言うならば、全くの異国に一人でいる私の状況を、その目で見て慰めて欲しかったのだ。

「年末年始にハワイなんて、いくらすると思ってるの？」

あっさりと言ったのける彼女が、悲しかったと同時に腹立たしかった。自分はずっと同じ場所で同じ人間に囲まれているくせに、恋人のいる場所へ旅行することも出来ないというのか。

「じゃあいいよ、こっちから行くのだって高いからな。帰らないよ」
返事がかえってくる前に受話器を乱暴に置いた。一分、二分、と彼女が電話をかけてくれることを期待したが無駄だった。代わりに今まで話していた自宅の電話ではなく、携帯電話が鳴った。

「よう、遼一。今、何やってんの？」

聞き慣れた声はマットで、私は思わず時計に目をやった。もう夜の十二時になるうとしている。いつも彼が電話をかけてくるのは夕方方の早い時間と決まっていた。

「何って、今、電話で彼女と喧嘩したところだよ」

思わず正直に言ってしまうと、間髪入れずに彼は電話の向こうで爆笑した。

「なんだよ、俺もちょうど飛び出して来たところなんだ。土曜の夜だってのにお互い情けないなあ」

あまりに明るい笑い声に、私は少し気分が軽くなった。

「どっか行こうぜ。車で迎えに来てよ」

一人で悶々と部屋にいるよりは、マットと遊びに行った方がずっといい。彼女には携帯電話の番号も伝えてあるから、部屋にいなけ

ればそちらにかけらるだろう。いいよ、と返事をして電話を切り、私は腰を上げた。

車はハワイに引越して間もなく買った。無論、新車を買う余裕も必要もなかったから中古車だけれど、一応日本車だけあって不具合もなく使える。ハワイ大学に近いアパートから、マットの指定したワイキキの西側までは十分とかならなかった。

常夏の島とはいえ北半球にある以上、ハワイにも冬はある。夜にはかなり気温が落ちるのにマットは相変わらずタンクトップで、寒そうな素振りも見せず車に乗り込んで来た。相変わらずサンングラスは外していない。

十二時を過ぎても人通りが多いのは、やはり週末だからだろう。

「どこに行く？ その辺に車を置いて飲みに行こうか？」

いつものお定まりのコースを提案した私に、マットは首を振った。「男二人つてのがなんだけどさ、ドライブしようぜ。満月じゃないか」

思わず苦笑が洩れた。ドライブなんて久しく行っていない。世界的な観光地に住みながら、車で遠出をしたことがなかった。道を知らないこともあったけれど、一人で行くのがつまらなかったからだ。「いい場所があんだよ」

マットに言われるまま、ハンドルを操った。長方形のワイキキを西から東へと流れるカラカウア大通りは四車線の一方通行だ。日本では信じられないほどに、ホノルルでは一方通行が多い。覚えてしまえば便利なのかもしれないが、それが面倒で車で出歩かない癖が付いたのかもしれない。

カラカウア大通りは途中から三車線になり、ワイキキ・ビーチのすぐ側を通ってカピオラニ公園へ入る。公園内はさすがに一車線だ。暗い公園内をスピードを落として走り、指示に従って公園の反対側の交差点から曲がりくねった道に入った。

「今、どこを走ってるの？」

答えが返ってくる前に、道はきつめのカーブを描きながら上り坂に

なっていた。

「ダイヤモンド・ヘッドを上ってんだよ」

なるほどと私は無言で頷いた。ダイヤモンド・ヘッドから見る満月は悪くないだろう。

しかし、やがて見えてきた展望台に、我が意を得たとばかりにブレーキを踏むと、マットは不満そうな声を出した。

「おいおい、ここが目的地じゃないぜ。こんなカップルばつかのところ、冗談じゃない」

言われて、通り過ぎようとする展望台を横目で見ると、確かに膝ほどの高さのコンクリートの塀にはカップルが鈴なりだった。道はすぐに下り坂になった。

「いいから、まっすぐ行つて。ずーっとまっすぐ」

街灯はあるけれども、そのオレンジの光は日本の街灯に比べて柔らかく頼りない。下り坂は左右に高い木の茂る中へと続いている。

私は恐る恐る車を進めた。

「ここは、カハラって言つて、高級住宅街なんだ。ここいらの家はみんな何億もするんだぜ」

こんな寂しげな場所が高級住宅地なのかと首を捻りたくなつたけれど、左右をちらちらと見て納得した。その建物だけ美しくライトアップされてあったり、あるいはおそろしく豪華な造りの門があったりといった風だ。家と家の間が離れているから寂しげな印象なのだ。

ホノルルには金持ちが多いらしい。道は延々と続いた。もつともスピードを落として走っていたからそう感じたのかも知れない。

やっと右手に公園らしいものが見えて来たときに、マットが「次のストップサインを左ね」と指示を出した。そういえばここまで、信号も一時停止のサインもなかった。

左に折れて、道はさらに細くなった。今度は明らかに住宅街と分る道をほんの二、三分進んで、やっと私は自分がどの辺りにいるか把握することが出来た。正面にオアフ島内の東西を走る高速道路の

高架が見えてきたからだ。左手に見えたガソリンスタンドの向こうに、カハラ・モールというショッピングセンターも見える。ワイキキからは大分東側に来たことになる。

「突き当りを右に曲がって、カラニアオレに入って」
助手席からは呑気な声がかかった。

「え？ カラ、何？」

当たり前だが、こちらの地名などはハワイ語が多い。ローマ字読みと同じなので、アルファベット表記なら戸惑うことも少ないが、突然言われると理解出来ない。

「カラニアオレ・ハイウェイだよ。いいから右に曲がって、右」
深夜のことで交通量が少ないのが幸이었다。私はおたおたとハンドルを切り、高架が下り坂になっていく脇にある道路に車を入れた。高速道路はここで途切れて、一般道路に合流していた。片側三車線の大きな幹線道路だ。

「あとはしばらくまっすぐ走ってくればいいからさ。あ、あんまりスピード出すなよ。お巡りがその辺の路地で張ってるからさ」

「詳しいね」

「そんなもん、長く住んでれば常識だよ」

短い言葉には、新参者への優越は含まれていなかった。むしろ、やり切れない疲労のようなものが感じられて、私は驚きながら尋ねた。

「マットは日本で生まれたんだろ？ どれくらいこっちにいるの？」
オレンジの街灯に照らされた道路は緩いカーブを描いている。時々信号はあるものの、ほとんどが青で、車は時速三十五マイルの制限速度を守りながら、東へ向かっていた。質問に一瞬黙った彼は、溜息と共に返事をくれた。

「なんだかんだで十年ちよつとかな。よそつよ、そつという話は」
触れられたくないのだろう。以前も身の上話をふった折に、何度も誤魔化されたが、今のようにはっきりと拒絶されるのは初めてだ。所在がなくなつて、私は黙り込んだ。

単調に続く道路を眺めて十分ほど経った頃、マツトが口を開いた。「正月はどうすんの？」

自分で顔が歪むのが分った。それなんだけどね、と口に出してしまつと、後は止めどなく愚痴が流れ出た。

信じられないよ、普通は彼氏に会いたいと思うじゃないか。だつてハワイだぜ、近いし観光だつて出来るのに。いや、ハワイじゃなくたって、恋人が暮らしている場所を見たいと思うだろ。それともあれかな、もう他に気になるヤツが出来たのかな。くそ、まだ半年も経ってないんだぞ。

刺々しく喋る私と反対に、マツトはいつもの軽い調子で、しかし親切に一々「そんなことはないよ」、「きつと結婚資金を貯めたいんだろ」と慰めてくれた。

「彼女はきつと遼一の方から会いに来てほしいんだよ」

何度目かの慰めをマツトが口にした頃、道路は片側三車線から二車線になった。右手は海だが、車窓越しにちらりと見た限りでは波もなく静まり返っていた。道順についての指示はない。そのままアクセルを踏み続けた。

左手はガソリンスタンドと小さいショッピングセンターだ。店はとつくに閉まつているのにあちこちに飾り付けてある気の早いクリスマス用の装飾だけが、ピカピカと自己主張をしている。クリスマスなんてなくてもいいのにと、私は忌々しい気分になった。

「おい、右の車線に入れな」

マツトの声に従つてハンドルを回した。目の前は急な坂になっている。

信号が変わつて、私は車を進めた。道幅は決して狭くないし、道路のアスファルトも新しいようだが、すぐに街灯がなくなり道路の右手に見えていた人家も途絶えた。

「対向車がないから、ハイビームにして大丈夫だよ」

闇の中に吸い込まれて行くようで、思わずアクセルから足を放しそつになつた時、マツトが軽く言った。進言通りライトを上向きに

すると不便はないものの、対向車すらないのが不気味だ。坂を上り切るとカーブになった。その先にまた緩い坂が待っていたが、私は坂の向こうに見えるものに一瞬目を奪われた。

月が海を照らしている。坂は真っ直ぐに海に向かっていった。

「ダイヤモンド・ヘッドなんかより、こっちの方が月がきれいに見えるだろ？」

得意げなマツトの声にはただ生返事を返した。

海にぶつかる寸前に道路はカーブして、陸地に沿って今度は下り坂になっている。なるほどこの道は、海のすぐ脇を走っているらしい。天気の良い昼間に来たら、さぞきれいだらう。

「あーっと、スピード落として。ほら、そこに展望台があるだろ？あそこに停めてよ」

マツトが大声を上げ、何事かと私が慌ててブレーキを踏まなければ、通り過ぎていたかもしれない。広めの駐車場に車を入れた。十数台は止められそうな駐車場に、他の車の影はなかった。マツトはさっさと車を降り、私も慌てて外に出た。

風が強い。潮の香りがする。そして、明るい。街の灯は今通ってきた山肌に隠れて見えなし、街灯もない。ただ月の光が煌々と周囲を照らしている。その明るさに驚いた。

他の展望台でも見られるように、ここにも駐車場と歩道の先に塀がある。大きな石をコンクリートで繋ぎ合わせて作ったものだ。しかし、ダイヤモンド・ヘッドの塀が膝ほどの高さなのに比べて、この塀は腰の高さだった。

塀の向こうには草木のない巨大な岩が海に面しており、その向こうで満月が輝いていた。月の光の下で波が岩にぶつかるのが見える。太陽の下で見るそれは爽やかさを感じさせるものだが、月の灯りだと荘厳な印象を受ける。

「明るいね」

「だろ？月の明るさを感じるにはこういう場所がいいんだ」

得意げにマツトは言う。先ほどのワイキキでも大分涼しかったが、

今は半袖シャツが辛いほどに風が強くて寒い。こんなことなら途中のコンビニエンス・ストアでコーヒーでも買ってくれば良かった。

満月を眺めながら飲むコーヒーも美味いだろう。言ってくれれば良かったのに、と文句を口に出しかけたが、マットは相変わらず寒そうな素振りもない。

彼は塀に手を掛けて跨ぎ越そうとしていた。

「行こうぜ」

「どこに？」

ここから先には行かないように、という意味で塀があるのではないか。ご丁寧に「ここから先は危険なので入らないで下さい」といった内容のサインが二つも出ている。面食らって言うと、マットは呆れたように掌を上に向けてみせた。

「頼むよ、アベックじゃないんだからさ。駐車場にずっといて何しようってんだよ」

それではこの先の岩場で、男二人であることがあるのか。私は黙って後に続いた。塀を越えると足元で砂がじゃりつと音を立てた。

「足元、気を付けな」

私はスニーカーを突っかけて出てきたが、マットはビーチサンダルだ。注意を促しながら、彼も足取りが慎重だった。サングラスを外してショートパンツのポケットに入れる。

彼がサングラスを外すのはめつたにない。小さいが愛嬌のある目だと思っけれども、本人は目の周りに皺が多くて嫌なのだと、女性のようなことを言う。

塀の内側から見たときは、それほどとは思わなかったが、実際に足を踏み入れてみると意外に広い。そして足場が悪かった。岩の破片が転がっている場所と、そうでない場所があるし、何故か岩肌は結構滑りやすい。段差や岩の裂け目もある。

ここは人間が歩く場所ではないのだ。歩くことを想定されていないから、当然整備もされていない。そんな場所にこの前行ったのはいつだっただろう。

岩場は大きく一つではなく、いくつか崖のようになって海に突き出している。その間は小さな入り江になっているのだが、入り江という言葉から連想されるような静けさはない。

非常に小型のリアス式海岸とでも呼べばいいだろうか。波が激しく打ち寄せ、渦を巻いている。落ちたら這い上がるのは大変だろう。かなり長い時間をかけて、私達は崖を下りた。岩は巨大な階段状になっており、先の方はこれまた大きな台の形の岩に、波が打ち寄せている。驚いたことに、水際の近くに岩が抉れてできたような窪地があった。

「休もうぜ」

無造作に腰を下ろしてマットがポケットを探った。ここまでの道程で履物が悪かった分、彼の方が神経を使ったのに違いない。私も隣に座り、胸ポケットから煙草を取り出した。車の中に忘れて来なかったのは幸いだった。

マットがポケットから掴みだしたのは煙草の箱だったが、中に入っていた煙草は妙に細い粗雑な巻きで、フィルターが付いていなかった。私は黙って自分の煙草に火を点けた。日本から持って来たウインドブルーのライターだ。

風を避けるために片手で覆いをしながらも、マットは火を点けるのに悪戦苦闘している。ほんの僅か躊躇してから私はマットに自分のライターを差し出した。

「サンキュ。それ日本製？ やっぱ日本のものはいいな」

深く吸い込み、溜めるようにしてからゆっくりと煙を吐き出す。

風があるのに、なんとも言えない強い匂いがした。

「それ、普通の煙草じゃないだろう？」

引っ掛かるものを堪えきれずに尋ねた。もしかすると幾分口調が咎めていたかもしれない。

「ああ？ 心配すんなよ。誰でもやってるって」

薬物に関わっている人間はきつと皆、同じ言い訳をするのに違いない。

私達は黙って海を眺めながら、それぞれ自分の物を吸った。マットが私の前に非合法的な薬物を持ち出したのは初めてだ。もっとも注射器などを取り出したわけではないし、実際に咎めだてはしなかった。満月の光もリラックスした気分には一役買っていた。

「この岩ってなんでこんなに筋がついてるんだろう？」

弛緩した声を出しながら、マットがすぐ脇の岩壁を指した。周囲の岩と同じく地層を示す横線が入っている。バウムクーヘンのようだ。

「地層だろ？　ここは火山の噴火で出来た島だから、溶岩が流れた跡かもね」

私も詳しいことは知らない。マットはふうん、とだけ言って話題を変えた。

「前にここでやったことあってさ」

何をやったのかは聞くに及ばない。彼が「やった」と言うときはセックスしかないし、相手は彼にとって重要ではない。今度は私がふうん、と言う番だった。

「外でやるのもいいよな？　あときは今日みたいに満月じゃなかったけどさ、興奮したな」

経験がないとは言わないけれども、セックスはベッドか布団があった方が私にとっては好ましい。それを言うとマットは声を上げて笑った。

「遼一らしいや。でも、別に外だったから興奮したんじゃないぜ。誰かに見られてるような気がしてさ、それで興奮したんだ。岩の陰から誰か覗いてると思ったんだ。だけど、終ってそっちに行ってみたら、そこは人が立ってられるような場所じゃねえの」

「なんだよ、それ。怪談？」

「いや、興奮したってそれだけ」

マットの声は弛緩したままだ。今のうちに、彼は時々猥談ともつかない話をするが、嗜好が違つらしく、相手と会えない私が羨ましくなるような話はまずない。とはいえこのまま猥談に突入するのは

ごめんだった。

ふいにマットが立ち上がった。何か言ったようだが聞き取れない。彼はそのままふらふらと歩き出した。私達の前にあるのは台のような形の岩場だけで、その向こうは海だ。

「どうしたんだ？」

声をかけたが聞こえていない風ではない。おぼつかない足取りで、彼は飛沫に濡れる岩場へ足を踏み入れた。腕をゆっくりと前へ伸ばす。誰かを捕まえようとしている手つきだった。歩みは止まらない。

「おい、マット」

私が立ち上がったのと、彼の足取りが速くなったのは同時だった。このままでは海に落ちる。慌てて彼を追いかけたが、彼の背中は遠くなる。夢中で彼の名前を呼んだ。

彼の背中と岩で弾ける波の距離がほとんどない。思い切って飛んだ。

腰にしがみ付いたつもりだったが、結果として彼を岩に叩きつけることになってしまった。波がうねった。

胸から上を海に突き出した形で倒れたマットはもろに波を被った。しかし、落ちはしなかった。一しきり苦しげに咳をしたあと、腹這いのまま後退してやっと顔を私の方へ向けた。

「さっきの女はどこ？」

私も上半身はすっかり濡れていたし、倒れ込んだときに打った肘がひどく痛んだ。

「何が女だ。馬鹿野郎」

マリファナが、これほど強烈に幻覚作用のあるものだとは知らなかった。そんなものを屋外で服用したら、危ないのに決まっている。私は初めてマットに腹を立てた。まだ岩の上で飛沫を浴びている彼の腕を取って立たせた。

「帰ろう。危ないじゃないか」

きょとんとした表情で周囲を見回した後、私の顔を見てマットは頷いた。同時に身震いを一つした。風が濡れた体から体温を攫って

いく。

帰路は来たときよりも数倍時間がかかった。降りるときに段差が大きかったり傾斜がきつかったりした場所は、飛び降りたり滑り降りたりしたのが、上りはそうは行かない。おまけにマットはまだ足元が危ないままで、「寒い、寒い」と言うだけだ。

舌打ちしたい気分だったが、ともかく駐車場まで戻らなければならぬ。夜が明けたところで助けが来る場所ではない。

両腕を体の前で組んで震えるマットに何か着せ掛けてやりたいとは思ったけれど、私のシャツも彼のタンクトップに負けず劣らずびしょ濡れだ。

「登らなきゃどうしようもないだろう」

自分とマットを叱咤して、私達はじりじりと岩場を上った。段差の大きいところは迂回し、傾斜のきつい場所は私が先に上がってマットを引っ張りあげた。そうやって腕を掴み、引き上げて彼の背中に触れたときに妙に熱いの気が付いた。

ようやく展望台の塀に辿り着いたときには、腰が抜けそうな安堵感を覚えた。塀を乗り越えたところで座り込んでしまいたかったが、マットは明らかに熱がある。苦しそうな息をしている彼の額に手を当てると、思った通りかなり高いようだった。

「医者に行こうか？」

「いや、保険ないし。誰か女のどこに行くから……」

のろのろとショートパンツのポケットから携帯電話を引っ張り出す。しかし二つ折りのそれを開いても、光は点かなかった。しばらくためつすがめつして、マットは溜息とともに「画面が割れてる」と洩らした。私が飛びついた時に割れたのに違いない。

「しょうがない。俺のアパートで我慢してくれ」

覚悟を決めて私はマットの腕を取った。こうしている間にもどんどん体が冷えていく。マットだけでなく私も熱を出しそうだ。一刻も早く熱いシャワーを浴びたかった。

シートに海水が付いてしまいが仕方ない。マットを助手席に押し

込んで、私は車をスタートさせた。彼はもう自分でシートベルトを締めることも出来なかった。

来た道を戻り、カラニアオレ・ハイウェイの長い道を辿ったまでは良かったが、そこから先の帰り道が分らない。カラニアオレ・ハイウェイの終点そのままH1フリーウェイに乗れるようになっていたけれど、私はフリーウェイに乗らず、右端の一般道路を辿った。

選んだ一般道路が市内の西へ向かっていることだけを心の支えにして、私は車を進めた。こんなことならもつと出歩いて、道を覚えておけば良かった。

両側二車線の道路が鄙びた感じのする街を通り抜け、長い坂道を下ってフリーウェイの高架が見えてきた頃、やっと愁眉を開くことが出来た。見覚えのある道筋だった。道路が何本も合流している交差点で私は車を右折させた。アパートまで五分ほどの地点だった。

玄関で崩れ落ちそうになるマットを何とかベッドまで連れて行った。彼が小柄なのがせめてもの救いだ。

私のアパートはワン・ベッドルームと言われる作りで、八畳ほどのベッドルームと、ほぼ同じサイズのリビングルームが付いている。独身男の一人住まいだから、当然散らかり放題だけれど、マットに文句を言う余裕があるとは思えない。ちらりと目をやった電話に、伝言ありの表示はなかった。

彼の衣服を脱がせ、私のTシャツとショートパンツを着せてから、やっとベッドに押し込んだ。それから、リビングルームへ薬を探しに戻った。

日本ではあまり聞かない家具付きのアパートというのは、こちらでは珍しくないらしい。リビングルームにはテレビもあるし、ソファとコーヒーテーブルもある。

その間に、大型のトランクが口を開けたままになっていた。片付けよう片付けようとは思いながら、引越してきてから数ヶ月間、ずっとそのままにしてしまった。必要な物があれば、そこから出し

て使うのだ。

膝について持って来たはずの常備薬を探した。トランクから出した覚えがないから、まだあるはずだ。ハワイに来てから、幸か不幸か薬が必要だったことがない。

ピンクの紙袋を見つけて、私は一瞬マットのことを忘れた。

常備薬一式は、彼女が買い揃えて渡してくれたものだ。日本でも一人暮らしをしていた私に、どんな薬が必要になるか、家族よりも彼女の方が知っていた。だから出発前にそれらを買って揃え、可愛らしくかつ、私の持ち物の中では目立つ色の袋に入れてくれた。

どうしても彼女に会いたくなかった。

紙袋を手に座り込んでいたのは、そう長い時間ではなかった。ただろう。開けたままのドアからマットの苦しげな声が聞こえて、私は我に帰った。慌てて袋を開ける。懐かしいパッケージの胃薬や風邪薬と一緒に、栄養剤も数本入っていた。

起きたのかと思ったけれど、マットは意識がなかった。無理矢理起こして薬を飲ませると、再び失神するように眠った。額は熱いし、呼吸も苦しそうだ、とにかく温かくして休ませればいいのかだろう。そう自分に言い聞かせて、私はシャワーを使うことにした。

濡れた衣服を一まとめにして、ゆつくりとシャワーを浴びると五時になっていた。今日は日曜日だから、仕事の心配はしなくていい。何か食べようと思ったときに、マットも空腹なのに違くないことに気が付いた。本当なら薬を飲む前に何か食べさせるべきだった。しまったと思いつながらベッドルームを覗いた。

彼はひどく腫れていた。額から首筋から、たった今海から上がって来たかのように汗が流れている。

「ち、違うよ。俺はそんなじゃない。そんなヤツ俺は知らない」
切れ切れではあったが、彼の言っていることは聞き取れた。起こすべきかと迷っている間に、彼のうわ言は続いた。

「……もう忘れたって」

昨夜、ガールフレンドの一人と喧嘩した余波が、うわ言になって

いるのかと考えたが、マツトが大きな声で「やめる」と叫ぶに至って、私は彼を揺り起こした。

「あ、ああ、遼一か。いやな夢見ちゃったよ。……でも、さつき岩場で見たあれは夢じゃないよなあ」

彼の瞳はまだ焦点が合っていない。それでも私のことは分かるらしかった。

「なに言ってるんだ。変なもの吸って幻覚を見たんだろう。もうドラッグには付き合わないからな」

「たかがポットで、幻覚なんか見るかよ。本当にあの女が見えなかったのか？ 畜生、あの女、どうやって俺の名前を……」

語尾は途切れた。彼は再び眠りに引き込まれてしまったが、私は目が冴え渡った。

台所で米を磨ぎ、マツトのための粥を用意しながらも、私は考え続けた。あの時岩場には誰もいなかった。それは確かだ。マツトは幻覚を見たのに違いないが、彼は吸っていた物のせいではないと言っ

う。もしかすると彼は重度の薬物中毒なのではないか。だから摂取していない時でも、体に残った薬物が幻覚を見せるのかもしれない。

今までは偶々それに気が付かなかったと考えるのは妥当だ。まさか警察に突き出すような真似はしたくないが、彼が薬物から手を切る方法はあるだろうか。

鍋を電熱器にかけて、電話帳を捲った。以前、その始めの部分にそういつた治療センターの番号が載っていた気がする。

ほんの数ページで番号は見付かった。ここなら相談にのってくれるだろう。しかし、彼らは警察や移民局に届け出る義務があるのだろうか。それに、マツトが同意するだろうか。

マツトに話すのには少し時間がかかった。せつかく作った粥も、マツトは三口がせいぜいだった。やむを得ず残りを冷蔵庫に放り込み、再び薬と栄養剤を飲ませた。

「迷惑かけるな」と朦朧とした口調では言うものの、すぐまたベッ

ドに沈み込んでしまう。そして何度も魔された。

陽が高くなる頃になっても、彼の症状は変わらなかった。日曜でも救急病院はあるだろうし、ワイキキ周辺には観光客が飛び込める、休日なしのクリニックがあると聞いたこともある。保険がなくても金さえ払えば拒否されることはないだろう。

そんなことを考えてインターネットを検索したり、何度か彼の様子を伺ったりしていたが、三時過ぎに覗いたとき、彼の呼吸がそれまでとは変わっていることに気が付いた。

魔されてもいないし、苦しそうな呼吸音も聞こえない。試しに額に手をやると、まだ熱はあるものの数時間前に比べれば嘘のように下がっていた。

五時まで待って、私はマットを起こした。

「まず食べなよ」

温めなおした粥を出すと、彼は盆の代わりになっている物を見て小さい掠れ声で笑った。大振りのハードカバーの本だったからだ。

「ホントに遼一っばい」

その本にだって、前回は気が付かなかった。大分良くなっているらしいと安堵した。

お粥なんて久し振りだよ、と言いながらマットは少しずつ口に運ぶ。私はベッドの端に腰を下ろして薬物中毒の話を始めた。意外なことにマットは真摯な態度で聞いた。しかし、薬物中毒の件に関しては頑なに否定した。

「マジで幻覚見るほどドラッグやってないよ。そんな金ねえもの」

「じゃあ、夜の海にふらふら歩いて行くのは一体なんだよ？」

言い合いというほどではないが、私がじれてきた頃、マットが食べ終わった器を本ごと手渡した。すげえ美味かった、という感想のあと、彼は長い長い溜息を吐いた。微かに洩れた声といい、疲れきった老人のようなそれだった。

「あのさ、俺は遼一みたいなヤツからすると、ロクでもない人生送ってるけど、幻覚見るほどドラッグにはまっちゃいないよ。金ない

からつてのも、ホントだけどね」

高熱を出した後だけに、疲れてはいるのだろうが、彼がぼそぼそと喋る調子は熱のせいだけとは思われなかった。

「俺ね、もう十年ちよつとこっちにいるんだ。マツトって本名じゃないよ、もちろん。最初は語学留学で来て、やる気満々だったんだけどドロップアウトしちゃった。親とか怒ってさ、俺もム力ついたら縁切っちゃって、『その内見返してやる』って思ったんだけど。就労ビザってちよつとやそつとじゃ取れないんだよな。まともな仕事には就けないし、学生ビザも切れるし、なんかこんな暮らしが身についちゃった」

初めて自分のことを語るマツトは弱々しかった。

「なあ、日本に帰れば？ 親御さんに謝ればいいじゃないか。仕事だって日本ならもつといい仕事があるよ。ビザの心配だってしなくて済む」

「いい仕事って、なんだよ？ 高卒で専門学校中退で、こっちの語学学校だってドロップアウトしちゃったんだぜ。タトゥーも入ってるしよ。コンビニのレジ打ちか？ 工事現場とか？」

コンビニのレジ打ちだって、不法滞在で不安定な仕事を続けるよりはましではないのか。少なくとも健康保険は手に入れられるだろう。

私が口に出す前に、唇の端をぎゅっと吊り上げてマツトは皮肉っぽく笑った。そうすると口の脇に深い皺が出来た。

「日本に帰ったって、いい事なんかないよ。いかにも人生に負けましたって感じじゃん？ それくらいだったらこっちでのんびり暮らしてた方がいいや」

あくまで彼は日本に帰った方が良くと思うのは変わらなかったけれど、それ以上説得することを諦めた。常々マツトが観光客を小馬鹿にしているのは知っていた。

焼肉屋のビラ配りの際、日本からの観光客に愛想よく渡すくせに、後から「けっ、田舎もん」などと言って晒う。日本ではない土地で

暮らしていることがマットのプライドらしかった。

外国で暮らすこと自体に価値はないと、私は思う。といってそれをはつきりと口に出すことは躊躇われた。

「じゃあ、とりあえずは頑張って熱を下げるんだね」

説得を諦めたことを示すためにそう言うと彼は、今度こそ邪氣のない笑顔を見せた。

「ああ、迷惑かけちゃったよな。思っただけど、あの幻覚は熱のせいじゃないかな。岩場に行ったときから多分熱があったんだよ。でなけりゃ幻覚が俺の名前を呼ぶわけがない」

腑に落ちないながらも私は「そうかもな」と頷いた。ついで先ほどの疑問を口に出した。

「マットの本名はなんていうんだ？」

「そんなのどうでもいいじゃん。意味ないだろ」

だるそうに、しかしはつきりと言った彼に、私はそれ以上突っ込まなかった。私たちはそういう馴れ合いの関係だった。空になった食器を受け取り、部屋を出ようと思ったときにマットの声を背中で聞いた。

「暮れは帰ったほうがいいんじゃないか？」

第二章

月曜の朝、まだマットは微熱があつたが、非常用の部屋があるからと私の出勤に合わせてアパートを出た。女友達のところではなく、別な場所があると言う。

「貸し倉庫なんだけどき、空調もあるしマットレスも置いてあるんだ。友達と共有だから、そこにいれば誰か来るから」

貸し倉庫と聞いて気の毒に思ったが、眠れるようにしてあるのは、泊まれる環境だからだろうと深く考えなかった。土曜の夜は一睡もせず、日曜の夜はソファで眠ったから、正直言つてベッドが恋しかった。二晩も三晩も寝ずに論文を書いたり、麻雀をしたのは昔のことだ。

ただでさえ身の入りにくい月曜の授業をこなし、昼に教官室へ戻った時にはへとへとだった。出勤の前にコンビニエンス・ストアで買った弁当をつつきながら、ふとハワイへ来る前に聞いた話を思い出した。

恩師に挨拶に行った際、居合わせた社会学の元教授が教えてくれた話だ。

定年を過ぎて非常勤で教えている彼がまだ大学を出たての頃、アメリカ本土へ留学した。同じ頃、英語と英米文学で有名な大学の教員がアメリカの大学へ留学していたのだが、彼は落第して、失意の内に帰国の途に着いた。

日本へ空路で向かう場合、真っ先に見えるのは富士山だそうだ。その富士山が、アメリカの大学で落第してしまった教員の心にどんな作用を及ぼしたのかは分らない。ただ彼は富士山が見えた途端、飛行機のトイレに駆け込み、頸動脈をカミソリで切ってしまったのだそうだ。

「当時の留学生仲間の間では、肝の冷える話だったよ」と、元教授は話を結んだ。

それが実話なのか、あるいは都市伝説ならぬ留学生伝説なのかは判断出来ない。恩師が常々「あの男は話をでっち上げるのがうまい」と言っていたから、事実ではないのかもしれない。しかし正に「肝の冷える」話ではある。

マツトはその教員とは違う。失意の帰国をせずに、違法でも外国へ留まる道を選んだ。私だったらどうだろうか。この大学での職を解かれて、次の仕事のあてもないまま日本へ帰国することになったら。

まず帰るだろうな、と考えたとき、ノックの音と共に浅黒い顔が入ってきた。ハワイ語担当のグラント・タガワだった。

「ミスター・キド、またベントーですか？ 好きですね」

ベントーという日本語が広くハワイで使われているのは、引越して間もなく知った。もつとも携行できる食事という意味ではなく、米飯におかずが付いてパックになったものを指すらしい。味は日本の物に比べて遥かに落ちるが、コンビニエンス・ストアでも扱っているのが嬉しい。

「ええ、まあ」

いつもの曖昧な笑顔で箸を動かすと、タガワは断りもなく椅子を都合して私の側に座った。

「疲れた顔をしてるじゃないですか。もしかして例の写真のせいですか？」

タガワという名字は日系の父方から受け継いだものだから、自分は立派な日系なのだと言は主張するけれども、母方から貰った白人とハワイアンの遺伝子が彼を日本人には見せない。浅黒い肌にくりつとした大きな瞳が、年齢よりも彼を若く見せている。

日系だと主張する割に、日本文化にそれほど興味がなかったらしい彼だが、最近になって急に心を惹かれるものが出来た。

どこで聞いたのか、日本には津々浦々、それこそ足の踏み場もないほどに「聖地」があるのは本当だろうかと私に詰め寄った。話を聞いて考えを巡らせ、古墳のことではないかと思いついた。

彼に話をした人物も日本には詳しくなかったとみえる。

大きいものは、面積ならエジプト最大のピラミッドをも越えるという私の話に、彼は異様なほどに興奮した。それが先週末だった。

図書館へ行って文献に当たるのが面倒臭く、私は週末の間にインターネットで写真を見つけ、彼に送る約束をしたのだ。すっかり忘れていた。

「すみません、週末は友人が病気になって面倒を見てたので」

「ああ、なるほど。しかし、あなたにそんな友達がいるとは知らなかった」

両の眉を不必要なほど上げて、「これは意外」という表情を見せる。いかにも西洋人的な仕草だ。友達の少ない奴と思われるけど、とくに、反論はなかった。

「ミスター・タガワ、例の写真ならきつとエンペラー・ニントクで検索をかければ、きつと英語のサイトでも写真がありますよ」

油っぽい唐揚げを飲み下して私はタガワに告げた。実は週末に話したとき、なぜか大山陵古墳の仁徳天皇の名前が出て来なかったのだ。いわゆるど忘れというやつだろうが、日本から離れていることだけで脱落して行く知識があることを知った。

「なんだ、そうですか。しかしミスター・キド、顔色が悪いですね。お友達のことが心配ですか？」

きつと私は嫌な表情を浮かべたと思う。彼はハワイ生まれのハワイ育ちだ。大学の学部こそ本土へ行ったけれど大学院はハワイ大学で、今もハワイで順調な研究生生活を送っている。

「友人は日本人なんですが、私も含めて……、外国で暮らすというのは苦勞もありますから」

羨ましいのだ。私だって出来ることなら、日本の大学で研究を続けつつ教鞭を取りたい。

「そりゃそうでしょう。この土地は外国人にも暮らしやすいとは思いますが、地元の人でないこと分らないことも多いですしね。想像はつきます。だから、もっと私たちを当てにしないよ、ね？」

笑うと極端に目尻が下がる。私はすっかり嫉妬の毒気を抜かれた。何か言った後に「Ya?」と付けるのはハワイの方言のようなものだと聞いている。日本語でいうならば「でしょ?」とか「ね?」といった感じだろう。

年中聞いている言葉だし、便利なので自分でもよく使うが、彼の言った「Ya?」には不思議な温かみがあつて、私の心と口を軽くさせた。

「じゃあさつそく、聞いて欲しい話があるんですが」

何度も言葉に詰まりながら、私は週末の事件をタガワに話して聞かせた。途中から彼の表情が険しくなつたのは、マツトの薬物使用のせいだと思つていた。

「それは……、いけませんね」

「そうでしょうか? 彼は病院で治療を受けるか、日本に帰る方がいいと思つんです。しかし、本人にその気がないものをどうやって説得したものと?」

アドバイスを仰ぐように言うと、タガワは下唇を付き出した。次いで、広い額にかかつている黒い巻き毛をかき上げる。

「違いますよ。幻覚を見たのが本当に熱や薬のせいなら話は簡単です。そうでない場合も有り得る」

「彼の神経が病気だと?」

それも違います、と低く言つてタガワは眉間に皺を寄せた。そうすると少しだけ童顔が年相応に見える。彼は三十代半ばのはずだ。

「あなたはまだ知らないでしょうが、この土地には色んなものが棲んでいるんですよ。笑つてもいいですけどね、私はコーリング・ゴーストの仕業かと思つんです」

は、と気の抜けた声を発して、私は彼の顔をまじまじと見た。「コーリング・ゴースト」と彼ははっきりと言つた。直訳すれば、呼ぶ幽霊ということになるが、本当に幽霊なのか、それともそういうあだ名の現象があるのだろうか。

「私の専門は語学ですが、ハワイの文化の一側面として、霊や心霊

現象もアカデミックに取り上げられているのが昨今です。そしてね、無視出来ないんですよ」

黙っている私が説明を求めているとでも思ったか、タガワは滔々と語り出した。

コーリング・ゴーストとは、やはり幽霊らしきものだった。人気のない場所で、突如見知らぬ美しい女から名前を呼ばれる。相手が自分の名前を呼ぶことから、不思議に思いながらも彼女に誘われて行くと高所から落ちたり、あるいは高熱が出て数日の内には死んでしまう。

呼ばれるのはほとんど男性だが、ごく稀に女性が男性に呼ばれることもある。マットが遭遇した出来事と、ぴったり一致する。

コーリング・ゴーストが現われるのは、ホノルルのあるオアフ島に限らず、ハワイ全島で似たような報告がなされている。古くからいるハワイ系住民の間には一般的な幽霊だと言われており、呼んだ女性に誘われそうになった少年を、先祖の霊が助けたといったケースもあるのだそうだ。

もっともハワイだけに限らず、サモア諸島などでも山間部で出会うと死ぬと言われている「アイトウ・ファFINE」は現在でも信じられているから、ポリネシア系の場所では珍しいことではないのかもしれない。

「でも、科学的じゃないですね」

小さい声で感想らしきものを述べた私に、タガワは大きな黒目を向けた。

「いやだなあ、ミスター・キド。今の科学だって万能じゃありませんよ。科学的にどうだってそんなこと構いやしません。大事なのは対処するかでしょう、ね？ 地動説が支持される前だって、引力が発見される前だって、我々は物を落とすと地面に落ちることは知っていて、落とすと物によっては割れたりするので気を遣っていたんですよ」

出来の悪い生徒に諭すようにタガワは言う。彼の声はその外見に

似ず、低めで落ち着いている。教員をやるにはぴったりの声だろう。「それじゃこの場合、私が気を遣うべきなのは何でしょう？」

「彼に、事件のあった場所には二度と行くなと言っことです」

おずおずと尋ねた私に、タガワは簡単に答えた。予想した以上に簡潔な答えだった。そうですか、とだけ言っ後言葉が続かない。「そうですね。だって薬物使用は誰かがちよっと言っただけでは、止まないでしょう。強制的に病院に連れて行きますか？ 精神が病んでいる場合だって同じです。保険もない彼の治療費を、払う覚悟がありますか？ もっとも、移民局に通報すれば、強制的に日本へ送り返してくれるでしょうね。日本へ戻れば良くなるという保証でもあるなら、最良の手でしょうけど」

あくまで穏やかに、微笑さえ浮かべてタガワは言い、私はまたしても黙り込んだ。反論の余地はない。

しばらくして彼は、写真がみつかったら飯をおごります、と笑顔で帰って行った。

次の休み時間にマットの携帯電話にかけてみた。壊れた電話はまだそのままだろうとは思ったけれど、他に連絡手段がないのだから仕方がない。電話をくれるようにとだけ伝言を吹き込んだ。

マットから電話があっただのは、それから三週間も経っってからだった。

どうしただろうと思っながらも、クリスマス休暇前の試験などに追われて日を過ぎ、いよいよ明日はクリスマス・イブという日になっ、やっとなマットが電話してきた。

「携帯はすぐに新しいのを買っただけどさ、なんだか急に忙しくなっちゃって」

屈託のない声で話す彼は続っ、私の年末年始の予定を尋ねた。彼女との仲直りはとうに済んでいた。安くはなかつたけれど飛行機の子ケットを買ったと告げると、マットは弾んだ声で「良かったじやん」喜んでくれた。

「楽しんで来いよ。戻ったら会おうな。この間世話になっただから、

何かいいものご馳走するよ。あれからついてるんだ、俺」

ついている、というのは一体どの点でついているのか、私は聞かなかった。病気のせいで弱った体を引き摺るように帰って行った背中だけを覚えていたので、微塵も暗さを感じさせない口調にまずほっとして、それ以外のことはどうでも良くなってしまうていた。

「いいのかい、それで」

分厚いハムを切り分けながら、グラントは少し非難がましい瞳を私に向けた。

例の事件を相談してから、グラント・タガワと私は急速に親しくなっていた。彼が日本文化に興味を持ち始めたこともあるし、私もハワイ文化を知りたいと思った。

自分の持つているものに興味がある相手なら、心を開くのは簡単だ。ファーストネームで呼び合うまでに、時間はかからなかった。

彼が親しみやすい外見とは異なり、かなり人間を選んで付き合うタイプだということを知った時には、ちょっとした優越感を感じたりもした。そういえば私が勤め始めた頃は、彼は決して近くには寄って来なかった。

「緊張し過ぎてるみたいで、側には寄りたくなかったな」

当時の私をグラントはそう評した。それは当たっているだろう。みっともない真似をしないようにと、そればかり気にして周囲を受け入れていなかったかもしれない。

「でも君は親切で真面目だ。友達になるのはタイミングもあるだろう？　今まで他の人と親しくならなかったのは、言葉だけが理由じゃない。下手なサーフィンみたいに、波に乗るタイミングを外してたんだろう」

ちなみに俺は乗る波を選ぶからね、と言い切った彼は自分のことをよく分かっている。親しい人間が出来ると、安心感から他の人間へも自分から話せるようになる。以前よりも職場へ行くのが楽しくなった。

初めての学期末試験を問題なく乗り切れたのは、まずグラントのお蔭だったと言っている。連日顔を合わせて試験が終わった頃には、日本へ帰省する前に訪れるクリスマスは、彼の家で過ごすことになっていた。

カウアイ島の親族の家へ集まる習慣になっているタガワ家の人々は、習慣を変えることなく三泊四日の小旅行に出かけたが、グラントとそのすぐ下の弟、ザクリーだけはオアフ島の自宅に留まった。二人とも「いい年をして独身だし、ガールフレンドもないから親戚に会うと色々言われる」と、グラントは肩を竦めて説明してくれた。

クリスマスは七面鳥を食べるものだとばかり思っていたけれど、こちらの常識では、七面鳥は感謝祭の食べ物で、クリスマスはハムだそう。あれこれと調味料をつけて、長時間かけてオーブンで焼き上げたそれを、グラントは生真面目な顔で私たちに切り分けた。「マツトって彼は、急に忙しくなって、しかもついてるんだらう？ 危ないことをしてなきやいいけど。君に巻き込まれて欲しくないよ」

話しながら一きわ大きく切ったハムを、ザクリーの皿へ取り分ける。ザクリーは顎を軽く上げる動作だけで感謝の意を表した。

「彼は最初に出来た友達なんだ。付き合いは切りたくないな」

「付き合いは切らなくていいか。彼の状態を何とかするつもりがないなら、友達を選べよ」

そうなのかな、と私は溜息まじりに呟いた。「そうした方がいいよ」という声は、驚いたことにザクリーの口から出て来た。

グラントの弟、ザクリーは兄と違っておそろしく無口な男だった。初対面で弟だと紹介されたときから、あまり喋らない。といって無愛想なわけではなく、目が合えば何とも親しげな微笑を送ってくる。

兄のグラントが小男で口数が多く、せわしなく動くのに対して、ザクリーは大男で無口でおっとりしている。

グラントは私が言おうとしている先を読んで次々と言葉を補って

くれるから、会話に不自由しないし、ザクリーは言葉よりも表情や仕草で会話出来るタイプだったから、私は楽にしていられた。

「考えてみるよ」とタガワ兄弟に短く返事をして、目の前のハムに集中した。タガワ家に伝わる調理法のお蔭で、私はハムの美味さを堪能出来た。

「本土に比べてハワイでは老若男女の区別なく、怪異現象がよく話題になるね」

食後にワインを傾けながら、話題はいつしかグラントの分野に移っていた。もつともあまりアカデミックな話だと、ザクリーはともかく私が分らないから、もっぱらグラントが実際に見聞きした怪談と言っていていい。彼の専門は語学だが、いずれはハワイ文化全般にまで広げたいらしい。

「それも『友達の友達が』、というんじゃないんだ。『私が』なんだよ。何か不思議な体験をしたとして、否定されるという不安なしに語れる土壌があるんだね。語る側にも聞き手にも『そういうこともあるだろう』という考えが共通してる。これはこれで健康な共同体だと思う。ところで先月うちの学生がね……」

学生のアパートに出た老婆の幽霊は、実は火山の女神ペレではないか、という話に始まって、グラントの話は尽きなかった。彼によると、オアフ島はおろかハワイ全島、至るところがお化けスポットらしい。

オアフ島の東側の町カイルアとホノルルを繋ぐ道路パリ・ハイウェイを、豚肉を積んで走ると車が止まるといふ伝説を聞いた時には、さすがに眉を顰めた。

「それって本当にそうなの？」

「いいや、そんなわけないだろ。ただパリ・ハイウェイには古戦場の跡もあるし、殺人事件や死体遺棄事件も数多くあったから、怖い場所には違いないよね。実際、現在の科学では説明のつかない事件も沢山起きてる」

現在の、というところに力を入れてグラントは言った。語られる

話の真偽のほどはともかく、ここまで怪談だらけの場所を私は他に知らない。グラントがハワイ文化の側面と言い切るだけのことはある。

私の常識を超えた場所に住んでいるのだと、心細さが頭をもたげた。

「とりあえず、行くなと言われていた場所には行かない。するなと言われていることはしなければ、怖い目には遭わないよ、多分ね」
ついで話してくれたのは、私も知っている学校の警備員の話だった。警備会社から派遣されている彼は、本土出身の気のいい白人だ。彼がグラントに話した体験だ。

別の警備会社に勤めていたとき、夜中にある小学校を見回っていると、何とも嫌な気分になった。誰かが見ているような気もするし、背後に気配も感じる。といって振り向くと誰もいない。毎晩同じ目に遭って、次第に体調も悪くなってきた。

「で、どうしたの？」

「うん、上司に配置換えを頼んで、受け入れられなかったから、今の警備会社に転職した」

「普通、小学校で前に何があったか調べたりしないか？」

怪談の終わりには因縁が付きものだ。もつともこれを怪談と呼べるかどうか分からないけれど。グラントは首を振った。

警備員の彼は、これは自分の知らない領分だろうと判断した。

彼にとって重要なのはそこで自分に起きることだけだ。踏みとどまって見極めたり、調べたりする必要は皆無で、そこへ行かないという行動だけを取った。

「賢い対処じゃないか。未知の領域にはむやみに足を踏み入れない。俺は今度、その小学校を調べに行くつもりだけど、怖いことが起きたら逃げ帰るよ」

最後は笑ってグラントはワインを口に運んだ。

誰かが見ている気がしたという警備員の話で思い出したことがあった。マットが以前、あの岩場でセックスした時に、見られている

気がしたと言っていた。しかも彼は誰もいなかったことまで確認している。その話をする、グラントは呆れた顔をした。

「そんな事があったのに、また同じ場所へ行ったのか。まあ、大した不快感じゃなかったんだろうね」

「その時もコーリング・ゴーストは様子を伺ってたのかな」

言いながら自分でおかしくなった。マットは熱のせいで見た幻覚だと思っているものを、いつの間にか私は幽霊だと考えている。

いや、その時は気のせいで、この間は本当に熱のせいかもしれないね、と笑って取り消すと、ザクリーがやけにきつぱりとした声を出した。

「それは違うね。ああいうものは、いる」

言った後は説明もなしで、又ここにこしているだけだ。グラントが補足のように口を開いた。

「支障がない限り、いると思っただけだ。コーリング・ゴーストは街中には出ないから、山や海に行くときは一人で行かない。もし、この前マットが一人でその岩場に行っていたら、確実に海に落ちてただろう？ 万が一何か起こっても、一人でなければ助かる確率は上がる。それはコーリング・ゴーストじゃなくて、ただの事故や遭難でも同じことだ。そう考えて行動するのは、難しいことじゃない」

「そうか。でも、いるとか、いるんじゃないかと思うと怖いよ」

「雨月物語」や「今昔物語」を読んで面白いと思うのは、昔々の作り話だからで、実際に幽霊だのがあるとすると、正直言って恐ろしい。

「もちろん怖いよ。だから怪しげな事が起きたら、まず逃げ出すって言うてるじゃないか。だけど俺は、幽霊よりもドラッグのやり過ぎで、通りすがりの人に銃を向ける、くそつたれの方がよっぽど怖い」

そついう事件が数日前に起きていた。撃たれたのはスーパーマーケットで、夕食の買い物をしていた主婦だ。ここは幽霊も非合法薬

物も「どこかの誰か」の話でない場所らしい。寂しいと思うことは減ってきたけれど、怖いと思うことが増えた。

携帯電話が鳴ったのは、夜の十時少し前だった。その朝日本から帰って来た私は、飛行機の中で眠れなかったせいでアパートに着くなり眠ってしまい、日が沈んだ頃に目を覚ました。

日本から運んだ本を床に広げている時に鳴った電話は、マットからだった。

「今日、帰って来たんだろ。これから会わないか？」

休みは明日まで取ってある。不愉快なことがあつて一人でのいるのが嫌だった。ワイキキに行くよと続けると、それには及ばないと言う。「車あるんだ。そこまで二十分で着く」

マットに会うのは、彼が海に落ちそうになって以来だ。夜の外出は長袖がいる。私はシャツの上からウインドブレーカーを羽織った。「久しぶりだな。本場の日本食はやっぱり良かっただろ」

快活な口調や、夜だということにかけたままのサングラスは相変わらずだったのに、説明のしがたい違和感を覚えた。以前の彼とは何となく違う。あの夜かけていたサングラスは、携帯電話と一緒に壊れたから新しいものだが、前のものと同じ形だ。もしかしたら彼の運転してきた車のせいかもしれない。決して古くない型のBMWだ。誰かから借りたのだろうか、マットには似合わない車だと思った。

「ちよつと付き合っしてほしいところがあるだよ」

助手席に乗り込むと、彼は馴れた様子でハンドルを操った。道もよく知っているようだ。アパートの路地を出ると、迷う様子もなく最寄りの乗り口からH1フリーウェイに乗り、街を東側へと向かう。車中での話題は、自然と帰省の話になった。帰る前には毎日のように電話もし、二人の仲は問題ないと思つたのは私だけだったようだ。はつきりとは言われなかったけれど、あてのない長距離恋愛は、彼女にとって負担なのだ。「やっぱり、距離って大きいね」と泣き笑いの顔で言われてしまつては、返す言葉もない。

「でも、別れようって言われたんじゃないんだろ？」

慰めるように言つて、マットは煙草の灰を灰皿に落とした。丁寧とは言えない動作で、灰皿の周辺には大分灰が飛び散った。

「そりゃ、もう他に誰かいるわけじゃないから。自然消滅狙いつてヤツじゃないのー？」

語尾をひどく伸ばしたのは、ヤケ気味なせいだ。きつぱりと別れを言い渡さなかったのは、私の性格を知っている彼女の優しさだろう。それを言つと、マットは声に出して笑った。

「分かるよ。俺も、『ダメだろう』と思うことがあつてもさ、はつきり『ダメだ』って言われないほうが楽なんだよね。でも、そうやってる内に、案外ツキが回ってくることもあるんだよ」

彼が言っているのが、女性関係のことか、今の生活のことかは分らない。ただ、前に電話で話した時も機嫌が良かったし、今晚つた時から調子が良さそうなのは見て取れた。

そんな話をしている内に、車はフリーウェイからカラニアオレ・ハイウェイに入って、先日通ったショッピングセンターに近付いていた。ここで人に会う約束があると、マットはショッピングセンターに車を乗り入れた。

降りようとする私を制し、すぐに戻つて来るから待っていてくれとだけ言つて、マットは小走りに近くのコーヒーショップへ向かつて行つた。

残された私はすることがなかった。最初は彼女のことを考え、次いでクリスマスにしたグラントとの話を考えた。「彼の状態を何とかする気がない」わけではないのだ。ビザのない不法滞在では、将来が明るいものであるはずはない。

いつかのホームレスの姿を思い出した。やはり、日本に帰るよう説得すべきだろう。まずは、今どんな風に上手く行っているのか、それを尋ねてみようと思いついた頃マットが帰つて来た。ご機嫌だった。

鼻唄を歌いながらコーヒーを差し出すと、エンジンをかける。

「近くまで来たついでにさ、この間のあそこに行ってみようぜ」

コーヒーが零れるほど驚いた。グラントの忠告をわざわざマットに伝えなかったのは、まさかマットがもう一度行きたがるとは思わなかったからだ。

零れたコーヒーをナプキンで拭い、私はグラントの話をした。マツトはげらげら笑った。

「マジ？　じゃあ肝試しってことでさ。お化けならお化けでいいじゃない？」

一体何がそんなにおかしいのか分らないが、彼は楽しそうに笑い続け、車はすでにシヨッピングセンターを出て、展望台の方向へ向かいつつあった。

あの夜、どれだけ苦勞して駐車場まで戻ったかを思い出してげんなりした。実際に幽霊らしきものを見たのは彼だというのに、この鈍感さはなんだろう。

半分近くまで欠けた月が低い位置に出ていた。展望台の風は今夜も強かった。

マツトが当然という顔をして塀を乗り越える。その時に笑って「今日はサンダルじゃなくて、ちゃんとスニーカーだから大丈夫だよ」と自分の足元を指差した。何が大丈夫なものかと思いつながら、私も彼に習って塀を登る。耳元で風が鳴った。

「俺、今度メインに行つてこようかと思つてんだ」

先日と同じ窪みに着いて腰を下ろすと、私が尋ねる前に彼が口を開いた。メインというのはアメリカ本土のことだと確認して私は首をかしげた。

「そっちの方にいい仕事でもあるのかい？」

「そういう言い方もあるな。せいぜい一ヶ月かそこらだよ」

一ヶ月で仕事というのは何なのだ。疑問を口に出そうとした時、私のことを誰かが呼んだ気がした。

最初は風が鳴っているのだと思った。実際、風は益々強くなり波の音もうるさくて、すぐ隣にいるマツトと会話するのが難しいほど

だった。

しかし、その声は繰り返し私の名前を呼んだ。聞きなれた声だった。

遼一、遼ちゃん。

岩陰から現れた人影を見て、私は飛び上がった。

なぜここに彼女がいるのだ。

「来て欲しかったんでしょ？ 会いに来たよ」

おぼろな月明かりは逆光で表情までは見えなかったが、間違いなく彼女だった。背後で誰かが何か叫んだ。

「なんで来たんだ。俺たちはどうせ別れるんだろ？」

彼女の薄いワンピースの裾が風になびいている。近寄って来ない彼女の声を聞き取るうとして、私は二歩、三歩と歩み寄った。

「別れたりしないよ。遼ちゃんは別れたくないでしょ？」

後ろから物音が響いているが、雑音にしか聞こえない。彼女が誘うように肩を動かし、両手をゆっくりと差し出した。

「好きよ」

私の右手を掴んだ両手から、彼女の体温が伝わる。ずっと恋しかったのはこれだ。彼女はハワイまで来てくれた。ゆっくりと私を引き寄せる彼女を、抱き締めようとした。

いい香りの髪が頬に触れた瞬間、世界は無音になった。

息が苦しい。何がどうなっているのか分らない。

とにかく苦しくて苦しくて仕方がない。

何度か体のどこかに激しい衝撃を受けて、やっと自分が水の中にいるのだと分かった。波が打ち寄せる度に、抵抗も出来ずに岩に打ち付けられ、渦巻く水に吞まれる。

段々と上下の感覚がなくなってしまう。どちらに向かって水を掻いたら空気が吸えるのか。

耳の奥で、まだ彼女が私を呼んでいた。苦しい気分が失せて来た。私は意識を投げ出した。

また誰かが呼んでいる。けれども今度は彼女ではない。動かない目蓋を必死に持ち上げて見た。

「リョーイチ、リョーイチ。You're gonna be okay。」

この男は誰だっただろう。思い出せないが、彼は必死に私に呼びかけている。まるで私が大事な家族でもあるようだ。

彼の後ろに見える月は相変わらず明るい。最後の気力を振り絞って私は彼に向かって微笑んでみせた。

「ひどい目に遭ったね」

緊急外来から一般の病室に移されると、すぐにグラントがやって来た。

私は頭を七針縫い、肋骨二本に罫が入り、足を捻挫していた。縫われたりレントゲンを撮られたり、スキャンにかけられたりしている間、誰かに連絡を取ることは考えもつかなかった。なぜ私が病院にいると分かったのだろうか。

「君に言わなかったけど、ザックは警察官なんだ」

私の顔色を読んで、グラントは申し訳なさそうに言った。それで思い出した。私を懸命に呼んでくれたのはザクリーだった。

「俺が海に落ちて、マットが警察を呼んで、それでザクリーが助けくれたわけ？」

意識が戻るとすぐ、入れ替わり立ち代わり警官がやって来た。本来なら立ち入り禁止の場所で何をしているのか、同行の男とはどういう関係かといったことをしつこく聞かれた。

非合法薬物の尿検査も求められたが、どういう経緯で私が海に落ちたかは、誰も尋ねなかった。

逆に、一緒にいた男はどうなったか、現場に日本人女性はいなかったかと聞くと、彼らは少し戸惑った表情をした。男についてはいずれ分かると言い、日本人女性はいなかったと断言した。

おそらく彼らは私がドラッグの幻覚作用で海に落ちたのだと考え、

だから尿検査を受けると言っているのだと判断した。私は一向に構わないが、マットは大いに構うだろうとそればかりが心配だった。彼女はいなかった。コーリング・ゴーストは、今度は私を呼んだのだろうか。

「マットはどうしたかな、知ってる？」

最初の質問に答えずに黙っていたグラントは、一度唇を引き結んでから開いた。

「彼は死んだよ」

海に落ちたショックで、英語の聞き取り能力がなくなったのかと思った。数回同じことを言われたグラントは「何度聞いても同じだよ」と顔を歪めた。

「ドラッグを巡るトラブルだったんだ。マットは撃たれたんだよ」

どういうことかさっぱり分からない。混乱している私にグラントは、順を追って説明してあげるよ、と溜息混じりに話し始めた。

「警察は詳しい場所や背景は発表しないし、ザックも言わない。だから細かい点は俺の推理だけだね」

海に落ちた週明けに私のアパートを出た後、マットは行った先の貸し倉庫で、ある犯罪組織が隠しておいた覚醒剤を見つけて盗んだ。大都市ほどではないにしろ、ホノルルにも犯罪組織はある。彼らが商品としての薬物を隠すのに、貸し倉庫がよく使われるそうだ。

貸し倉庫といっても、大きささまざまなサイズがある。一般的なのは四畳半から六畳ほどの大きさで、仕切りはあるものの、上部が日本で言う欄間のように開いて金網だけになっており、音などは筒抜けらしい。

グラントは、そういった倉庫の一室で寝ていたマットが偶然、他の部屋で交わされた会話を聞いたのだろうかと言った。

具体的に倉庫の鍵などはどうしたのかは分からないが、覚醒剤を手に入れたマットは早速売り始めた。「アイス」と呼ばれるそれは、マリファナなどに比べて格段に高価なものだそうだ。マットは売り方を知っている。私が電話をした時に機嫌が良かったのは、大金を

手に入れたからだっただ。

「でも、ホノルルは狭いからね。盗まれた方は頭に来て泥棒を探し、そうでなくてもいきなり卸し元も分からないアイスを売るんじゃない目立つだろ？ 彼はそういう事は考えなかったみたいだね」

「あの夜、一ヶ月くらい本土に行こうかって言っていたんだ。逃げるつもりだったのかな？」

「一ヶ月じゃあ逃げたことにはならないよ。もしかしたらアイスが金になるんで、自分で本土から運ぼうとでもしたんじゃないか」

私が黙り込むと、グラントはともかく、と話を続けた。

普段は慎重な組織が動き出したのは、すぐに警察に察知された。

あの夜、マットは組織に尾けられていて、組織は警察に尾けられていたのだ。

マットがシヨッピングセンターで接触した相手は、すでに薬物所持で逮捕されたと、グラントは付け加えた。

「ザックは言わないけどね、もしかしたらリョーイチの話聞いてヤツなりに思う所があったのかもしれないな。俺だって、マットが急に羽振りが良くなったって聞いた時に忠告しただろう」

「それで……、どこで彼は死んだんだ？」

グラントの目と口が大きく開いた。

「ちよつと待つてくれ。君は組織の連中から逃げるために海に飛び込んだんじゃないのかい？」

私が彼女、あるいは彼女の形のゴーストと話している間に、組織の人間はマットに近付いた。そして溺れている間に殺してしまった。銃声を聞いて展望台付近にいた警官達が駆け付けた時には、マットはもう息をしていなかったそうだ。

マットの動きをも監視していた警官達は、マットに連れがいることも知っていた。だから周囲を探して、私を見つけてくれた。

「もっと早く警察が来ていればマットは死ななかった、と君は言いたいだろうね。だけど、奴らがアクションを起こさなければ、警察だって手は出せないんだよ」

そうか、そうなんだ、と言いながら呼吸が苦しかった。

罫の入った肋骨が痛んだ。あのサングラス越しの笑顔にはもう会えない。なぜこんな事になる前に、無理矢理にでも領事館へ連れて行かなかったか。

マットは死んでしまった。彼女にももう会えない気がした。

犯罪組織の構成員が五人も逮捕されたニュースは新聞の一面を飾り、覚醒剤の取引を巡るいざこざで「マット」と名乗る日本人が殺された件も報道された。しかし、マットは相変わらずマットのままだった。

財布に入っていたのは現金だけだし、唯一の手掛かりだった携帯電話は他人の名義だった。マットに携帯電話を貸していた日本人女性は、彼の死を悲しみはしたものの、マットの本名などについては知らなかった。

警察が調べて連絡を取ったその女性以外、マットの素性を探る手立てはなかった。誰も「あれは自分の知っている誰それではないのか」と警察に連絡した人間がいなかったからだ。

私と、マットの友人だった女性が「日本人だった」と証言したため、警察は日本総領事館に知らせはしたらしい。しかし、パスポートの有無や在留届はおろか、名前すら分からないとあっては日本国民として扱うことは出来ないとの返答だったそうだ。

そういった話を、私はタガワ家のリビングルームでザクリーから聞いた。

一般病室に移された翌日には退院を言い渡された私に、グラントが家に来るようにと勧めてくれたのだ。グラントの両親に、祖母、弟妹に加えて甥や姪までいる大所帯は、静かではなかったけれども慰められた。

彼女の姿をした得体の知れないものが追って来るのではないかという恐怖も私の中にはあったから、いつも誰かがいる環境には助けられた。

初めはマットを、次は私を誘ったコーリング・ゴーストは一体何だったのか。マットの時は、彼の知らない女の形だった。私の前には彼女の姿で現れた。

「そういえば、マットの名前は分からないままだけど、でもコーリング・ゴーストは呼んだんだ」

私はふいに思い出してグラントに告げた。マットは自分の脳が見せた幻覚だから、自分の名前を知っているのだと考えたけれども。

「ただで後で魔された時には、自分じゃないって言ってたんだろ？ 彼はマットのままでもいいんじゃないか。君が聞いたときだって教えなかったんだし。きつとその名前で呼ばれていた頃に、は戻りたくなかったんだ」

妙に納得した顔のグラントに、私は少し腹が立った。

「だけど、そんなの寂しいじゃないか。外国で、誰にも知られないで死んで行くことを考えてみるよ」

「寂しいのは、君だろう」

厳しい調子でグラントは言い切った。

「彼は仕方なかったんだ。あんな生活をしていれば、こういう死に方だって予測出来たはずだ。彼には元の名前に戻って、日本に帰る選択肢だってあったんだ。君はそう進言したことだってあったじゃないか。帰らずに危ないものに手を出したのは、彼が決めたことだろう？ 君だって、一歩間違えば死んでたんだよ。撃たれるか、溺れるかしてね。将来、もし君が死んだら、間違いなく日本へ連絡が行くように手配するよ。そう思えば寂しくないかい？」

圧倒的な正論に、私は俯いた。死んだ後に連絡されたって、果たして自分がそれを感じるかどうかは、死んでみなければ分からない。「君を落ち込ませるために言ったわけじゃないよ。友達が死んで、悲しいのは当たり前だ。だけど、あんまり寂しがっていると、またコーリング・ゴーストに呼ばれるよ」

ぎょっとして顔を上げた。コーリング・ゴーストは、寂しい人間を呼ぶのだろうか。だとしたら、マットがそれを見たとき、彼もや

はり寂しかったのだろうか。

あの夜、彼女の姿をして現れたゴーストの声や仕草を思い出して、背筋が寒くなった。同時に、その存在を疑っていない自分にも気が付いた。

「冗談だよ。そんなに簡単に法則性なんて割り出せるもんか。君の体験は俺の研究にとつて貴重なサンプルだけどね。こう考えたらどうだろう。いつかコーリング・ゴーストに呼ばれた少年を、先祖の霊が助けた話をしたよ、ね？ 君のケースはあれと似ていて、しかも逆だ。君を助けたいと思う何かが、彼女の姿で現れたんだ。あのまま岩場にいたら、危ないと判断して君を海に引きずり込んだ」

「マツトも一緒だったら良かったのに」

「そいつは君だけが大事だったのさ。だから確実に君を捉まえられる人の姿で登場したんだ。きつと君のために命綱なしで海に飛び込む、馬鹿な警官が来るのも知ってたんだろうよ」

実に下手くそだったけれど、グラントが私を慰めようとしているのは分かった。少し口元が綻んだ。真つ赤に照れたザクリーがキツチンへ入って行く。その手に白く目立つ包帯を見て、少し救われた気持ちになった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4382s/>

呼ぶもの

2011年4月13日05時55分発行